第四講 演習問題 一・二・三

一 次の文章を読んで、問いに答えよ（設問の都合上、訓点を省略した部分がある）。

武進諸生楊某、館於某氏。其人富而豪侈。毎夜飲必三鼓。一日酔帰、見館中灯火甚盛。従窓隙窃窺之。見案辺二燭卓立甚巨。有緋衣人、拠案観書。意其楊也。明日詢之。①楊対以実早寝未嘗夜読。然心怪之。至夜、仮寐以②伺。近三鼓、忽有大声伝呼。排戸而入。随有二巨燭出地上。已而紅焔満室。僕隷雑遝、擁一緋衣人至。拠案而坐、取案上書冊翻之。楊懼而叫呼。緋衣人若不聞者。将五鼓、緋衣者徐起、径趨楊臥処。衆皆従之。忽挙床四脚盤旋室中、③復擲之空中者数四。天

将ニレ曙ケント、又聞ク二伝呼ノ声ヲ一。④寂無所見矣。久シクシテ之楊始メテ甦よみがヘリ、起チテ視レバ二門戸ヲ一、扃けい鐍けつ如シレ⑤故ノ。問ヘドモ二院中ノ人ニ一、毫モ無シレ所レ聞ク也。因リテ急ギテ謝シテ二主人ニ一帰ル。帰ルコト数日ニシテ火大イニ作おこリ、所レ居ル皆燼やケリ。始メテ悟ル二所レ見ル乃チ火神ナルヲ一耳。

（『池北偶談』）

注 武進＝地名。 諸生＝科挙（官吏登用制度）の受験生。 三鼓＝午後十一時から午前一時の間。
案＝机。 仮寐＝寝たふりをする。 僕隷＝しもべ。 雑遝＝多くのものが混み合うこと。
五鼓＝午前三時から五時の間。 盤旋＝ぐるぐる回す。 数四＝三、四回。 扃鐍＝戸の掛け金。

問1 傍線①の「楊対以実早寝未嘗夜読」の書き下し文として、最も適当と思われるものを、次の中から選べ。

1 楊対ふるに実に早く寝ぬるを以てし、未だ夜に読むことを嘗こころみず。
2 楊対ふるに実に早きを以てし、寝ねて未だ嘗て夜に読まず。
3 楊対ふるに実に早く寝ね、未だ嘗て夜に読まざるを以てす。
4 楊対へて以て実に早く寝ね、未だ夜に読むことを嘗こころみず。
5 楊対へて以て実に早く寝ね、未だ嘗て夜に読まず。

問2　傍線②に「伺」とあるが、どのような光景を目撃したのか。その説明として、最も適当と思われるものを、次の中から選べ。

1　楊の大きな掛け声に応じて緋衣の人を中心とした一群が入って来て部屋に火を放ち、楊が机上の書物を閉じたかと思うと、緋衣の人は突然楊の寝台を持ち上げて空中に投げつけた、という光景。

2　楊の大きな掛け声に応じて緋衣の人を中心とした一群が入って来て部屋に火を放った時、緋衣の人は机に向かって書物を読んでいたが、突然楊の寝台を持ち上げて空中に投げつけた、という光景。

3　大きな掛け声とともに緋衣の人を中心とした一群が入って来て、赤い炎が部屋中に広がり、楊が机に向かって読書を続けていると、緋衣の人は突然楊の寝台を持ち上げて空中に投げつけた、という光景。

4　大きな掛け声とともに緋衣の人を中心とした一群が入って来て、赤い炎が部屋中に広がり、緋衣の人は机に向かって書物を読んでいたが、突然楊の寝台を持ち上げて空中に投げつけた、という光景。

5　大きな掛け声とともに緋衣の人を中心とした一群が入って来て、赤い炎が部屋中に広がり、楊が机上の書物を閉じて様子を見ていると、緋衣の人は突然楊の寝台を持ち上げて空中に投げつけた、という光景。

問3　傍線③の「復」、⑤の「故」の読み方を、③については送りがなも含めて、それぞれひらがなで書け。

③＝

⑤＝

問4 傍線④の「寂無所見矣」の意味として、最も適当と思われるものを、次の中から選べ。

1 しんと静まりかえっていて誰の姿も見えなかった
2 さびしい夜だったのに家の誰にも会いたくなかった
3 しんと静まりかえっていて誰も気付くものはなかった
4 とてもさびしい夜なのに誰もやって来てくれなかった
5 とてもさびしい夜だったので人影ひとつ見えなかった

二　次の文章を読んで、後の問いに答えよ（設問の都合で返り点・送り仮名を省いた箇所がある）。

呉人有焼桐以爨*者。邕*聞火烈之声、知其良木、因請
而裁為琴。果有美音、而其尾猶焦。故時人名曰焦尾
琴焉。初、邕在陳留*也、①其隣人有以酒食召邕者。比往而
酒以酣焉。客有弾琴於屏*。邕至門試潜聴之曰、
憘、以楽召我、而有殺心、何也。遂反。将*命者告主人曰、
蔡君向来、至門而去。邕素A為邦郷所宗、②主人遽自追
而問其故。邕具B以告、③莫不憮然。弾琴者曰、我向鼓弦、
見蟷*螂方向鳴蝉。蝉④将去而未飛、蟷螂為之一前一
却。吾心聳*然、惟C恐蟷螂之失*之也。此豈為殺心而
形於声者乎。邕莞*然笑曰、此*足以当之矣。

（『後漢書』蔡邕列伝より）

注
＊爨　飯を炊く。
＊邕　蔡邕。後漢末の儒学者。
＊陳留　地名。現在の河南省陳留県。
＊屏　ついたて。
＊将命者　取り次ぎの者。
＊螳蜋　かまきり。
＊聳然　恐れるさま。
＊失之　蟬を殺そうとすること。
＊莞然　にっこりと笑うさま。
＊此足以当之矣　これですっかり謎が解けた。

問一　波線部Ａ「素」Ｂ「具」Ｃ「惟」の読み方を、送り仮名も含めてひらがなで記せ。

Ａ＝

Ｂ＝

Ｃ＝

問二 傍線部①「其隣人有以酒食召邕者」の書き下し文として最も適切なものを次の中から選べ。

ア 其れ隣人有り、酒食は邕を召す者を以てす。
イ 其の隣に人有り、酒食を以て邕を召す者なり。
ウ 其の隣人に酒食を以て邕を召す者有り。
エ 其れ隣に人有り、以て酒食は邕を召す者なり。
オ 其の隣人は以て酒食を有して邕を召す者ならん。

問三 傍線部②「主人遽自追而問其故」とあるが、主人がそのような行動をとった理由として最も適切なものを次の中から選べ。

ア 琴の名手である蔡邕にも自慢の琴を弾いてもらいたいから。
イ 蔡邕は平素から世の人々に尊敬されている人物だから。
ウ 取り次ぎの者が蔡邕をぞんざいに扱ったことを知ったから。
エ 古くからの友人である蔡邕に帰られては体面にかかわるから。
オ 儒学者の蔡邕の推薦によって任官したいと望んでいたから。

問四　傍線部③「莫不憮然」とあるが、その解釈として最も適切なものを次の中から選べ。

ア　一度はいぶかしいことだと思った。
イ　ぼんやりしていぶかしく思わなかった。
ウ　いぶかしくないなどと思ってはならない。
エ　無礼にもいぶかしいことだと思った。
オ　いぶかしく思わない者はいなかった。

問五　傍線部④「将去而未飛」をひらがなのみの書き下し文にせよ。

問六　前の文章から蔡邕の持つどのような才能が読み取れるか。次の形式に従って（□部分を）二十字以内にまとめ、解答欄に記せ。ただし、読点や記号も一字と数える。

蔡邕は、□才能を持っていた。

三　次の文章を読んで後の設問に答えよ。ただし、設問の関係で返り点、送り仮名を省いたところがある。

人無毛羽、不衣則不<u>犯</u>(1)寒。上不属天、而<u>下不著地</u>(2)、以腸胃為根本。不食則<u>不能</u>(3)活、是以不免於欲利之心。欲利之心不除、其身之憂也。故聖人衣足以犯寒、食足以充虚、則不憂矣。<u>衆人則不然</u>(4)。大為諸侯、小余千金之資、其欲得之憂不除也。胥靡(注1)有免、死罪時活。今不知足者之憂、終身不□。故曰、<u>禍莫大於不知足</u>(5)。

（『韓非子』による）

（注）1　胥靡――徒刑者。囚人。

問

（A）——線部(1)の「犯」の解釈として最も適当なもの一つを、次記各項の中から選べ。

1　苦悶　　2　甘受　　3　変容
4　容認　　5　克服

（B）——線部(2)の解釈として最も適当なもの一つを、次記各項の中から選べ。

1　未熟でまだ地に足がついておらず
2　地下に潜って住むことはできず
3　身分の低い者は豊かな生活ができず
4　力のない者は天下を支配できず
5　植物のように地に根をおろしておらず

（C）——線部(3)の読みを平仮名・現代仮名遣いで記せ。

（D）　――線部(4)について。次記各項のうち、その内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ　多くの人々は憂いから自由になることはない。
ロ　多くの人々は成功して地位を得たとしても満足できない。
ハ　多くの人々は毛や羽が無くても気候に順応できる。
ニ　多くの人々は罪を犯しても許されることがある。
ホ　多くの人々は空腹が満たされれば幸福を感じる。
ヘ　多くの人々は財産を得ても満足できない。

イ＝　　ロ＝　　ハ＝
ニ＝　　ホ＝　　ヘ＝

（E）　空欄□にはどのような語を補ったらよいか。次記各項の中から最も適当なもの一つを選べ。

1　笑　　2　施　　3　解
4　始　　5　遊

（F） ――線部(5)の書き下しと解釈の組合せとして最も適当なもの一つを、次記各項の中から選べ。

1 ［書き下し］ 禍は足るを知らざるより大なるは莫し。
［解釈］ 満足することを知らないことよりも大きい災禍はない。

2 ［書き下し］ 禍は足るを知らざることに於いて大なるは莫し。
［解釈］ 災禍に満ちた世の中のことは、考えないのが一番よい。

3 ［書き下し］ 禍の大なること莫ければ足るを知らず。
［解釈］ 大きな災禍を経験しなければ、満足は得られない。

4 ［書き下し］ 禍大なれば足るを知らざる莫し。
［解釈］ 災禍が大きければ、かえって真の満足が得られる。

5 ［書き下し］ 禍莫きは足るを知らざるより大なり。
［解釈］ いま災禍が起こらないのは、将来満足を得るよりも大事である。

【第四講】

〈模範解答〉

一

問1　3　　問2　4　　問3　③　また　⑤　もと　　問4　1

二

問一　A　もとより　　B　つぶさに　　C　ただ　　問二　ウ

問三　イ　　問四　オ　　問五　まさにさらんとして〔まさにさらんとすれども〕いまだとばず

問六　音を聞いただけでその状態や心が読み取れる（二十字）

三

A　5　　B　5　　C　あたわず

D　イ　1　ロ　1　ハ　2　ニ　2　ホ　2　ヘ　1

E　3　　F　1

〈現代語訳〉

一

武進の科挙の受験生の楊は、ある人の屋敷に宿泊していた。その人は金持ちで大変贅沢であった。毎晩いつも飲むと、午後十一時から午前一時くらいになっていた。ある日（主人が）酔って帰ると、屋敷の中の灯火がとても明るいのを見た。窓のすき間からこっそりと部屋の中を覗いた。机の側にとても大きな二本のロウソクが立っているのが見えた。赤い服の人が居て、

机に寄りかかって書物を読んでいた。（それを）楊であろうと思った。翌日（主人は）昨晩のことを尋ねた。楊は「本当に早く寝ていて、今まで一度も夜中に書物を読んだことはない」と答えた。しかし心の中でこの事を不審に思った。夜になって、（楊は）寝たふりをしてこっそり見ていた。午後十一時から午前一時くらいになると、突然大きな声で触れ回る者がいる。部屋の戸を押し開いて入ってきた。二本の大きなロウソクが床から出てきた。そして真っ赤な炎が部屋に満ちた。しもべが多くいて、一人の赤い服の人を警護して（部屋に）やって来た。（赤い服の人は）机に寄りかかって座り、机の上の書物を手に取って読み始めた。楊は怖くなって大声で叫んだ。赤い服の人は聞こえない者のようだ。午前三時から五時の間になろうとする頃、赤い服の人はゆっくりと立ち、すぐに楊が寝ている所に走ってきた。召使いも皆その後に付き従った。突然、寝台の四つの脚を持ち上げて部屋の中でぐるぐる回し、再び寝台を空中に投げ上げること三、四回。夜が今にも明けようとすると、また触れ回る声が聞こえた。（すると）しんと静まりかえっていて誰の姿も見えなかった。しばらくして楊は正気を取り戻し、立って部屋の戸を見ると、戸の掛け金は元のままだった。屋敷に住む人に聞いたが、少しの物音も聞こえなかった（という）のである。よって急いで主人に挨拶をして去った。立ち去ってから数日後に大きな火事がおこり、（楊が）居た部屋は全部焼けた。そこで初めて見たもの〔＝赤い服の人〕が「火の神様」だと楊は悟ったのだ。

二

呉の人に桐の木を焼いて飯を炊く者がいた。蔡邕は火がはじける音を聞いて、それが良木であることを知り、そこで（その木を）もらって切って琴にした。やはり美しい音を立てたが、その端の部分はなおも焦げていた。よって当時の人は焦尾琴と名付けた。かつて、邕が陳留にいた時、その隣人に酒食で邕を招く者がいた。行く時には酒宴はすでに盛り上がっていた。客に琴をついたての陰で弾く者がいた。邕は門のところに至ると試みにこっそりこれを聴いて言うには、「ああ、楽しいことで私を招いたのに、それなのに殺伐とした心があるのはどうしてか」と。そのまま帰った。取り次ぎの者が主人に告げて言うには、「蔡邕様が先ほど来ましたが、門のところまで来て帰りました」と。邕は平素から世の人々に尊敬されているので、主人は慌てて自分で後を追ってその理由を問うた。邕は詳しく告げたが、いぶかしく思わない者はいなかった。琴を弾いた者が言うには、「私は先ほど弦を弾いている時、かまきりがちょうど鳴いている蟬に向かっていくのを見ました。蟬は今にも飛び去

ろうとしてまだ飛ばず、かまきりはそのため進んだり退いたりしていました。私の心が恐れるさまであったのは、ただかまきりが蟬を殺そうとすることを恐れたからです。これがひょっとして殺伐とした心を生じさせて音に表れたのかもしれません」と。邕がにっこり笑って言うには、「これですっかり謎が解けた」と。

三

人には毛も羽もない。（服を）着なければ寒さを克服できない。上は天につながっておらず、下は（植物のように）地に根をおろしておらず、胃腸を根源としている。食べなければ生きることができず、こういうわけで利益を欲する心から逃げられない。利益を欲する心が除かれないのは、その身の悩みである。だから聖人は着るものは寒さを克服するのに十分で、食事は空腹を満たすのに十分であれば、悩まない。多くの人々はそうではない。大は諸侯となろうとし、小は千金の財を残そうとして、それを得ようと欲する悩みは（いつまでも）除かれないのである。徒刑者も許されることがあり、死罪も時には助かる。今や満足することを知らないものの悩みは、一生解けない。だから言うことには、「満足することを知らないことよりも大きい災禍はない」と。